

ランドスケープデザインによる工藝作品の環境芸術への拡張に関する研究 ーリビングヘリテージの保存・利活用における対話によるデザインの実践ー

大阪芸術大学 大学院 嘱託助手 角倉 起美

研究目的(概要)

本研究は、関係性のデザインプロセスを手法とした文化財建造物の保存利活用のケーススタディである。過去から受け継いだ文化財を含めた環境をどのような実践的活用によって次世代に継承することができるのかについての研究である。工藝作品を用いてランドスケープデザインを展開することで、リビングヘリテージ(生きている文化遺産)としての固有の価値を見出すことを目的とする。

研究背景

本研究は、学位論文の発展的研究である。工藝家である筆者が本研究を展開することができた背景には国登録有形文化財ウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の六甲山荘を中心としたエリアをリビングヘリテージとして保存・利活用する環境整備プロジェクトに参加する機会に恵まれたことにある。

筆者は、2016 年からこの活動に携わり運営理事、工藝家としてアクションリサーチを実践している。より広い文脈でみると、ランドスケープデザイン、リビングヘリテージの保存・利活用という現代的な課題に工藝的アプローチを展開したと言える。リビングヘリテージは多義的な概念であるが、本研究では、有形、無形の文化遺産の要素を別々に捉えるのではなく、総合的に捉えて活用する。社会的資源として捉え、ナショナル・トラストの理念をもつ個人やコミュニティが自ら所有し専門家やステークホルダーと共に実行する。

また、元のままであることを目的とするオーセンティシティ(真正性・本物の価値)の概念は大切ではあるが、歴史の変化に伴って時代に合った機能変更が望まれることもある。柔軟な変化に伴うインテグリティも未来に向けての重要な概念となる。活用に伴い変化することで新たな歴史と価値を創り出すこともある。

研究方法・実践

当該の建造物がヴォーリズ設計であることから、共通するネットワーク組織も構築されている。ヴォーリズ建築作品は文化財として指定や登録されている建造物も少なくない。保護するために所有者がそれぞれの地域の体制に沿った方法で守っている。国内の主要な現存建築が、文化財としてどのように保存管理されているかを当該の活用と比較する為、文化財とその周辺地や敷地に特色のあるものを事例として取り上げ、所有者の立場の違いに着目し考察する。

① ヴォーリズ六甲山荘(小寺敬一の夏別荘)

神戸市灘区六甲山町/竣工 1934 年

ナショナル・トラストの理念のもと認定 NPO 法人アメニティ 2000 協会が所有し保存管理活用されている。

② 駒井家住宅(駒井卓・静江記念館)

京都市左京区北白川/竣工 1927 年

公益財団法人日本ナショナルトラスト(JNT)事務局が中心となって専門家によるワーキングを定期開催し、保護管理委員会で承認を得て行っている。

③ 睡鳩荘(旧朝吹家別荘)

長野県北佐久郡軽井沢/竣工年 1931 年

旧朝吹家別荘は 2009 年移築され有限会社塩沢遊園 軽井沢タリアセンに託され保存管理活用されている。

上記3箇所、フィールドワークおよび関係性のデザインプロセスを実践した。工藝的アプローチによってデザインを構想し、多領域の専門家、研究者と協働しながら事物としての工藝作品を制作し、実社会、生活世界に組み込む試みを展開した。すなわち、既存の工藝作品を環境の中に設置するのではなく、実際の環境の中で工藝作品を構想し、関係主体との対話を通してそれぞれの環境に貢献できるデザインを実践した。

また、制作した工藝作品は単体としての事物として存在するだけでなく、ランドスケープデザインを展開する要素となるように意図して創り出されたものである。工藝作品を含むランドスケープが生成する記号現象に注目して、制作の過程で考えていたこと、および実現した環境の中で経験したことを振り返り、工藝作品によるデザインの展開の可能性を考察した。このことは、ランドスケープに組み込まれた工藝作品による記号現象の多層性を明らかにすることであり、美術評論家ロザリンド・E・クラウスによる『アヴァンギャルドのオリジナリティ』『展開された場における彫刻』(1979)という論文に大きな示唆を得ている。「展開された場における工藝作品の位置付け」を検討する際の基礎資料として着目し分析した。

考察と課題

工藝作品の環境芸術への拡張というデザイン実践には多層におよぶ対話のプロセスが組み込まれている。自己の立ち位置や対象との関わり、共生共創アプローチとして事象を意図的に自己の制作プロセスの中に取り込み、多くの人間と組織が制作に関わっていく関係性のデザインを実践していると言える。そのことから、フィールドワークが重要である。しかし、今年度もコロナ禍での実践は多くの場面で問題が発生したことから継続中の研究もある。今後、新たな事例蓄積のため研究を引き続き実践する必要がある。研究成果報告で作品画像とともにさらに詳しく報告する。